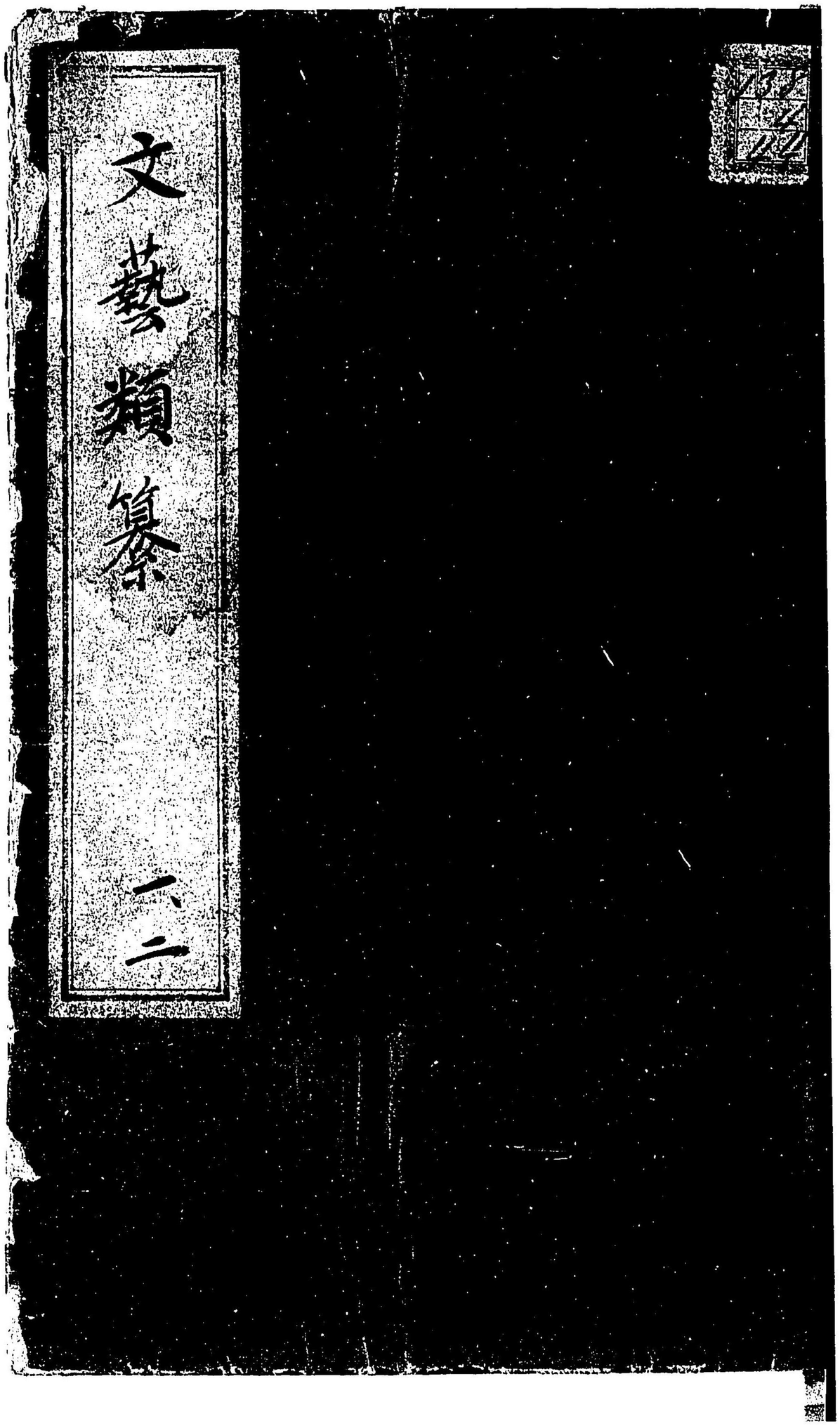


084831-001-7

138-44

文芸類纂

榊原　芳野／編

M11

DBA-0176

文藝類纂

138
8
44

東京圖書館

利書門	類書類	一二三	函	二一	架	四七	號	四五	冊	八

明治十一年一月

文藝類纂

文

省

文藝類纂序

家有璧玉。知其爲至寶。無與之較優劣者。則藏之匣中。而不深用意於拂拭磨礪之功。及聞隣人亦有璧。其光彩或勝於我璧。始覺往時之怠。日夜拂拭磨礪。以求出乎其上焉。然則比較之智。所以發自奮

之氣。而天之常生可比較之物。則所以試其比較之智之具與。往昔朝鮮支那之學。入於本邦。與邦人固有之才相結。而爲本邦之文藝。雖其行文用語。與二國不同。而至於彼此相較。東西相比。競其優恥其劣。則與同文之國。莫大相異者。

本邦文藝之一時致隆盛者。雖由邦人天資之才。亦不得不謂比較競爭之力。與而有功也。及與隣國絶。本邦文秋。肆然而放。頽然而衰。近二百年。文運再興。于古有光。然以其所比較。獨止支那朝鮮。其競爭之志。猶未甚大也。及與歐米諸

國締交。西洋文執。遠入於我邦。於是所比較之境界始大。而競爭之心方盛。得見本邦文藝之超越於前代。必在今日之後矣。夫文運之開。則世運之開也。造物者欲世運之益開。則宜使文運之開。如水之就下。日夜進而不止。而數百年間。

或進或退。或躊躇一處者何也。蓋天下之事。無專於進者。亦無專於退者。進十步。退五步。遂歸於進者。不獨文運爲然也。然則本邦文藝之進於往古。退於中世。至今日。有將大進之勢者。亦天則之常而不足異也。頃本省命榊原芳埜。使類

纂本邦文藝之事。上自往古。下至近代。分門四。爲篇八。引證詳確。叙事簡明。於稽本邦之文藝。最必要之書也。是書所記。皆從來委棄匣中者。幸得可比較之文。執於歐米。爲發競爭自奮之志。將新試拂拭磨礪之功。若得能發照乘之光。耀海外諸州。則眞可稱國之至寶也。

明治十年十二月

文部大書記官西村茂樹撰

內田義脩書

例言

一全部分ちて三志とし文學是なり末附をはる文具志を以てす其中筆墨造法ハ高木紹安の録をる所あり

一編中援く所の書詳なり略あり詳ある者ハ直に其文を舉け漢字及片假名平假名等一ゑ原書ゑ從ふ實を主として華を要せされハなり

一字志中寫し載せさほ所れ古人の書ハ果して其眞蹟ゑることを找證し難しと雖只示をゑ字體を以てせんことを欲それハなり又片假名ゑ至りてハ古書の傍訓ゑ係

る者多く字體瑣細なるを以て皆謄寫せしして之を摹
仿す

一編中古人の傳を載る者多くハ略ほ從ふ文藝の史ほ
て古人の傳ほ非れハなり

一音樂歌舞ハ技藝類纂中ほ載せんとに故ほ律法樂章皆
之を省く

一卷中畫圖ハ北爪有鄕狩野良信の摹寫せし所なり

一此書主意唯文藝ほ止まるを以て古書編輯の事を略に
然らされハ法律武術音樂等を混せさはことを得さる
を以てなり

文藝類纂總目錄

卷一
字志上
卷二
字志下
卷三
文志上
卷四
文志下

卷五
學志上
卷六
學志下
卷七
文具志上
卷八
文具志下

文藝類纂總目錄畢

文藝類纂卷一目錄

字志上

字志總論
平假字及伊呂波論
片假字及五十音論
五十音圖諸體
五十音韵所生原始
日文及諸神字論并肥人薩人書及諸可疑古字
習字沿革

假字音總論
和字總論
點圖并倒讀論
附點笏角筆字指等圖

東京帝國大學圖書館藏

文藝類纂卷一

榊原芳野　編

字志上

字志總論

我國大古ゟ文字ふし而して其文字ありといふい彼の日文及天名地鎮秀眞等を認めて上古の者と謂ふより起れり日文等上古の者ふらにしといへとも是後世捏造せし者ゟ非に近世ゟ傳ふる上つ文ふとの類しい異ふり日文等のこと後ゟ舉くへし已ゟ人々知れるゟ如く齊部廣成ゟ古語拾遺ゟ上古之世未有文字の語固證にへし大同の時已ゟ文字

なしといふ若これあらんその其字存せんしいへども其有無
ゐ至りてゝ一二の書豈これを傳ふる無らんや且殊ゐ故
家の齋部氏ゐ於きてをや且後世の書しいへども朝野群
載三大江匡房筥崎記ゐ我朝始書文字代結繩之政卽創於
此朝此朝ハ應神帝を申し又三善清行ゥ昌泰四年革命勘文ゐ上古
之事皆出口傳故代々之事應遺漏なしもあり上古より百
事言語のみゐて傳へ〜者ゐして橿原定都の後九百年餘
其間外國人の來るあれとも未文字を齎〜來る者あらん
蘇那曷叱智、天日槍等來るあれとも其頃ハ韓國ゐも未文
字あらんし見えて傳ハれる者なし氣長足媛尊の新羅を

討ち給ひて韓國ゐ往來をほこと多くなりてより差文字
も傳ちり〜ふるへ〜然れとも書紀ゐ封重寶府庫收圖籍
文書とあるハ前漢書の語を填めたるものゐして例の神
武紀の漢文の詔と同〜く信をへからん縱當時文字渡り
さりとも其頃未學習の法あらさり〜ふり書紀應神天皇
紀十五年秋八月壬戌朔丁卯百濟王遣阿直岐貢良馬二匹
云々阿直岐亦能讀經典卽太子菟道稚郎師爲とこれ經典
を讀む始ふれし文字を用ふ事を通をほも此頃より較自
由と得〜ことは太子隋帝ゐ遺れる書ゐても知ちう然
れとも元來其語を同〜くせさるを以て只其字音を假り

て我國語を綴りしことも有りけまし古事記の序に謂へるが如く全く音連者事趣更長と其煩を厭ひしなるへし然れとも祝詞宣命古歌等ハ其語の違をさらんかとを欲するが故に字の間々に借音字を加へて章をなし歌に至りてハ全く借音字にて書をるこゝ古事記萬葉集の如し是後世假字の起る所なり其始ハ楷體にて阿伊等に寫しを阿に阿に作り伊を伊に作るが如き竟に其旁を省きア或ヲイ等の省文を用ひてより片假字此に權輿(片假字のこと後に擧く)又安以等の字を用ひしを便に從ひてこれを草體にし安以等の體を書せしが遂に流れてあいとなり終

にあいの字を生せしなり其作者諸書に數說ありといへとも其字體ハ自致をしるしありしなるへし新井君美の同文通考中に釋日本紀を引きて曰く此說ニヨルトキハ伊呂波トイフ物ハ空海ノツクレリト云フ事徵トスヘキコトハナシタヾ俗間ニイヒツタフルノミナリ又其字體モ空海始テツクレルニハアラズタヾ古吾國ニ行ハレシ字體ヲ用ヰテ四十七ノ字母トナセシコトハ空海ニ起レルナルヘシ其字體ヲ見ルニ多クハ異朝ニイハユル草法ヲ用ヰシ所ナリといへる當れり又古本催馬樂に眞字を以て書しし其間の假字りいも等の字を書し朝野群載に載

もる宣命なも此の如き類見えあるゝ已な假字有る時ふ
れと猶其平假字片假字の轉ー成り來る濫觴を見るへー

平假字及いろは

平假名及伊呂波四十七字の起れるゝ世な傳へ言ふ贈大
僧正空海ゅ作れる所なりと然れとも其說確實ふらに釋
日本紀一 開題 又問假名之起當在何世哉云々伊呂波者弘
法大師作之由申傳歟此者自昔傳來之和字於伊呂波仝被
作成之起也河海抄梅枝な江談を引きて通本江談抄なゝふ ー又簾中抄な見ゆ
云天仁二年八月日向小一條亭言談之次問曰假字手本者
何時始起乎又何人所作哉答云弘法大師御作云々件事無

所見但大女御御自筆假字法華經供養之被行御八講講師
南北英才相遞爲導師高名清範慶祚等之輩各振富樓那之
辯才之後源信僧都又勤此事說云日本國者誠雖爲如來之
金言唯以假字可奉書也弘法大師傳習諸眞言梵字悉曇等
密法之後寄四教法文作イロハニホヘド讃給以來一切法
文聖經史書經典不離此讃文字イロハニホヘトノ字色ハ
匂ヘドト云心也此比已な今の如くチリヌルヲワカふし稱ゝて今様の四句なゝ唱へきりー證
ふ不說他事只以此一事令講而人々皆驚耳之由所傳聞也
古人日記中在此事下略又曰伊呂波有三段イロハニホヘト
チリヌルヲ大安寺護命僧正作ワカヨタレソツネヒモセス

迄弘法大師作、作京或説慈覺大師と京字を加へさるも舊
し盛衰記四十八巻一巻毎にいろはを以て標とし京字を
加へたり又倭假字反切義解の序に弘仁天長年中弘法大
師釋空海造四十七字伊呂波云々日本紀纂疏一序問我應神
時漢語東漸、和字則起于弘法大師空海故上古未有文字而
天神地祇之事傳世大可疑焉又僧頓阿の高野日記にも大
師此山をきりひらかせ給ひて中略いろはの四十八字をを
しへさせ給ひしより末の世の人の助にもなりぬるきこ
え侍りしかの下略なといへるは世俗の言傳へしまゝを記
せはなり

然るに假字本末伴信友に凌雲集の仲雄王が空海に贈る
詩を載せて飛流馴道眼動殖潤慈澍字母弘三乘眞言演
四句の句を引きて空海製造の證とし然れとも未確證
とするに足らしとにいふ字母ハ伊呂波を謂ふに非
らす又幇滂等の支那後世の三十六字母にも非らし是
空上人傳來の悉曇體文の字母を以て專三乘の意を闡
明せられしをいふ是毗盧舍那經の意にして字門道と
以て善巧の法門とせるなり既に三代實録天安三年三
月十九日大僧都眞雅の表にも所謂悉曇梵字者凡聖之
教父人天之智母也所以學字相者廣生世間之庶智觀字

義者深證出世之妙智云々とかゝる是なり眞言演四句ハ伽陀四句を謂ひ空上人の詩句を賛せしふり（伽陀下ノ注に已ノ）空海の遍照發揮性靈集の序ノ（即弟子眞濟の文なり）故毗陵胡伯崇歌云説四句演毗尼凡夫聽者盡歸依と是亦上人の詩を賛せしなり伽陀とハ此ノ偈といひ又四句とも稱も其體多く四句あるゝ故ふるへ〳〵金剛經應化非眞分ノ持於此經乃至四句偈等受持讀誦といひ翻譯名義の序ノも雪山大士求半偈而施身法愛梵志敬四句折骨等の語亦只四句とのみ稱する例なり若其字半ふるゝ其數奇あるときハ不足を補ひ字を加へて誦讀ノ便を

ることあり悉曇原十二字ふるを𑖀𑖁𑖂𑖃の四字を加へ〳〵等是ふり悉曇藏一曼陀羅禪師の傳を引きて此是外道師葉波跋那教婆多婆哥王以後四字足爲十四以王舌强故令王誦此字と原强舌を輭ノそるゝ爲といへも是亦誦讀ノ便あるか爲ふり以上援く所ノ據れハ其學ハ字母の義を以て三乘の法を弘通〳〵吐く所の眞言自四句の章を成を意ノて四十七字八句の伊呂波を稱せ〳〵ノ非を

又大師年譜ノ據るゝ假字の起れるハ空海より前と爲そへきゝ如〳〵といへとも是亦其是非を詳ノせ以大師年譜

近年の著ふれと多く野山の古記を援用しさりよ或記云弘仁十年六月一日云々大師令授與大工給印明同其夕方此眞言令忘失仍實惠大工奉問之處實惠カナノツキヤウアヤシミ給テ高祖御前詣奉問下略又高野見問秘錄曰弘仁十年己亥六月中略同夕方此眞言各々忘失了仍實惠一大二大共奉問之所實惠假字ノツキ樣ヲ怪ミテ高祖御前詣兩明奉問云々此文眞言ヨ假字ヲ付けたるヨて伊呂波を卽眞言なりといふヨ非ル假字ヲ本末ヨ卽これをいろはふりとして山槐記の次伊呂波の文を援きて卽假字を讀次くふりとせしハ非ふり次伊呂波とハ悉曇十八章ヨ倣ひて此語を用ゐさるヨて今

も密宗の僧ハ常語とル是摩多體文を次て續きて字を爲そを以てなり上文ヨ據れハ空海より前已ヨ假字あるヲ如し然れとも只野山所傳の記錄ヨして文章拙劣ふれハ確證とハ爲難し又其他天地麗氣記といふ書を空海の撰とし其中の文色葉の字あるを以て空海自作の假字を讃揚せし如く謂ふ者もあれと是後世僞託の書ヨして取ヲヨ足らル亦眞跡のいろはを傳ふる者も亦眞ヨ大師の手書とも定め難し古人も深く怪しむ所ヨして愈其證とな しかさし又沙門行智の抄錄書の中ヨ一說を載せたり曰く或人ハ菅公ノ御作トモ云ヘリ此ハ伊呂波ノ踏文字ヲ

取り連ネテ讀ムキハとかなくてしすト云ルニヨリ彼公ノ大宰權帥ニテ無實ノ罪ニ薨レタマフコトヲ自作リ玉フト云フモ非ナリト」等の異說ハ至りてハ人を絶倒せしむるハ過きし前ハもいへる如く常の假名を俗ハいふ萬葉假名漸ハ草書ハして流れ來たる者ふまいは小大君の自ら道風筆中ハ見ゆ〜る同はの同のいろは等ハ變し後竟ハいろはとなれるゝ如く自出來りたる體ハして別ハ作者あるハ非るへし故ハ古ハ多く草假字と稱せしなり宇津保物語菊宴ハめぐらし文しておくハさうのかかきつけて下略枕草紙ハ人の草假字ゝきたる草紙とり出て御らんじ」古今序注顯昭ハ或說

貫之之草假字序誂紀淑望令書眞名序又これを女てゝ稱ふ宇津保物語國讓女手ハして」まさゝらぬ君ハ人の云々と云ひ又源氏物語梅枝ハ女手を心ハいれてふらひしさゝり」ハなやいへり又其首字を采りて此章の名とせしハ台記久安六年正月十二日今日今麻呂參御前依勅書伊呂波山槐記假名本末引く所余ゝ藏本ハふし今日訪三藏院法印次伊呂波著聞集和歌部同御時の事二條院ハふりやいろはの連哥ありけるハ誰とゝやゝ句ハ「うれしかるらん千秋萬歲」とおゝうけるハ此次句ハあもゝドハやはくへきハや侍ほ云々「ゐハ今宵あを」ハ子の日とかそへつゝ」家隆卿の家ハてこの連歌侍りけ

るゝ「ぬれよけり志ほくむあまの藤衣」大進將監貞度（トシ）といふ小侍つけ侍りける「るきゆく風をほしてけるこゝろ」人々しらみてるきゆく風を笑ひけれハ（下略）此頃已ゝいろはと稱する目ハ行もれしなり

片假字及五十音

片假名ハ原省文略寫の爲ゝ偏旁を去りて用ゐ始めし者と見えて古き書跡中ゝ存する者一定の則なくして愈古きハ愈一定なし是一人の手ゝ出てゝして自（ラ）此字體をなしたるなり其權輿何時なるを詳ゝせゝこれを吉備眞備ゝ作り創しといふ說あり倭假字反切義解（右大將藤原長親法名明魏正平頃の人）序ゝ夙聞太古之代未有漢字云々到於天平勝寶年中右丞相吉備眞備公取所通用于我邦假字四十五字（即眞字上を假用せるをいふ）省偏旁點畫作片假字抑四十五字音響反阿伊宇江乎五字此乃天地自然之倭語焉是故竪列五字横列十字加入同音五字爲五十字（下略）又青蓮院の藏ゝて世尊寺行經の奥書ある以呂波本源ゝも此事あり曰くたゝ又片假名といふハ（ひとつゝハ大和假名と云ふ）吉備大臣のはしめて製せられしより古より言傳へゝり（ト部兼俱の神代卷抄）中略たゝらハ聖武孝謙二世の比ゝ片假名おこれるゝ心得へし其字の形を論せハ大略ハ梵字の體文の半體ゝあらひて漢字の扁作り

をわゝち又ハ其聲其訓を假りて用ゐし故ゑ片假ゑといふゑるへし群書一覽ゑ多田義俊ゝ以呂波聲母傳を引て曰く孝謙天皇の御宇吉備大臣入唐して王化玄といふ人ゑ逢て日本の語をつふさゑ語り給へハ王化玄これを音ゑ直してあいうえおかきくけこ等の相通をたゝ吉備大臣ゑ傳ふ安以宇の類ふるを大臣我國ゑ歸りて後或ハ偏を取りあるひハ旁をとりて略字ゑ書なしこれを片假字といふ又曰く吉備公の手ゑ成るとこと野府記ゑ見えとりとこれ片假字并ゑ五十音圖共ゑ其人の手ゑ成れりといふゑり然れとも反切義解ゑ又云世俗傳稱之云吉備

大臣,倭假字反切此文の如く是世俗の所傳ゑして此公渡唐して百爾文物を載せ歸られしより動もそれハ附會の談を設けて甚しきハ竟ゑ野馬臺詩を讀ミ圍碁を鬬そし燈臺鬼ゑ逢ふ等の話あるゑ至る況て文學ゑ至りてハ皆其權輿を公ゑ歸せ然れとも音博士を歷又唐國ゑ學へる人ゑして豈我國古來四十七音なる字を故ゑ二字を欠きて同音の字ゑて塡むる事をせんや此時ハ未ゑ南都盛ふるとき又てこれより前の日本紀古事記此ときより下れる萬葉集ゑ至りても四十七音判然として民間俚俗ゑ至るまて口ゑ稱へ耳ゑ聞くこと後世訛轉の音ゑ慣ゑ力を

勞〳〵てこれを分つゝ如くならん然るを字音を正しへき圖ゐして古人豈此杜撰あらん且公ハ續日本紀ゐ音韻籀篆等まて明なること見えさるハ直ゐ唐國の人ゐ傳習〳〵てこれより前の人よりハ殊ゐ精密なるへきをや假字本末ゐ古の音ハ悉曇法ゐ據らさり〳〵故誤ふく此公ハ悉曇法ゐ據りて作れるゝ未〳〵其奥ゐ至らさるゝ故ゐ才オの差別ゐ惑ありたらんと云るハ凡て悉曇を知らさるより〳〵る論をいふ者なり此公又苟も悉曇ゐ據りて作りなうらヰオを欠き又ヰオの所屬ふと混をへきゐ非を且悉曇ハ最澄空海歸朝後ふらていなきをとかく強て眞備の作とせんとして誤れるなり彼の反切義解ハ中古のもの

ふれと吉備公の作ふりとの徴ゐハ取り難〳〵又以呂波問辨尾州ハ來山興正寺諦忍ふりゐ問フ世上盛ニ用ル片假字ハ○寶曆年間の禪僧ふりゐ吉備公ノ作ナリト云ヒ傳フ爾リヤ否答人口ニ專ラ言傳フレトモ慥成書ニ所見ナシ仍テ決シテ吉備大臣ノ作ナリト落着シカタシ是ハ本阿伊宇江乎等ノ五十音ヲ漢字ノ點畫ヲ取リテ作リテ早業ニ用ルモノナリ中略此五十字門ハ儒家ノ書ニ出タルコトニ非ス元來專悉曇家ニ傳ル所ニシテ梵字ナリ云々愚按スルニ吉備公時ハ眞言梵字ノ學未備ハラス然ルトキハ此片假字ハ吉備ノ作ニ非ル

へゝと此書諸説採るへき者少しといへとも此條を大ま見る所ありといふへしさてかゝなの名のものゐ見えしゝ宇津保物語國讓さしつきまかさうゐ云々又藏開一ッまを うゝかんゐひとつゝあしで云々狹衣一上其ほとりま硯もとめて奉りたるしてさゝうかゝゐゐゝさうんなまて」又三下手をさひのやうまかさゝゐまゝき給ひて」堤中納言物語むしめつる姫君かゐゝまゝゝき給ゝきりけれゝかゝうんゐま」宇治拾遺物語三かさうなの袍もしを十二ゝゝせて給りてよめと仰られけきゝねこのこれこねこゐゝのこの志志とよみさりけきは」又小世續一名宇治大納言物語まも載さり文同し等の語あ

りて舊く用ゐし者ゐきとと其作者をゝ誰まとも屬をること能ゝ以其一定ゐらさるゝ宇志の下ま詳まに

五十音圖諸體

片假字の下まいへるゝ如く作者ゝ的知をへからに」といへとも空海歸朝悉曇傳播の後まあるへしそゝ反切義解等ま載る順序ハ各異ゐれと諸書殊ま多きゝあいうえおの次叙ゐり然れとも法橋顯昭ゝ袖中抄ま載るハアエオウイの序まして管絃音義まゝ阿字伊乎衣と列ね越後伊夜比子神の社司傳ふる所の五十音ハウオイエアなり假字本末ま引く所なゝ是皆故ま次序を變せし者まして天文本和名抄

巻首釋日本記タチツテトの同五音也云ふ即アイウエオおり　并反切義解等皆今の如く序さり是悉曇十二字の長音と空涅槃とを去りたる者よりて決して他より移まる者よ非に詳よ次の五十音所生の篇よ論に其始へ平假字片假字何よて書せしを知らにといへとも恐らくへ天文和名抄の如く眞字よて列ねしを後片假名よ轉せしゝ知るへからに且此法を設くること儒家の爲ゝ僧家の爲ゝと疑そしはけれと儒家よへ已よ音博士ありて支那の音を傳へ一々所傳ありてこれを教へしふきへ此法を設けて音を律せしふとへなきことふるへし且此を次序せしへ中古こそあれ古へ秘密の教として例の

密學の習ふれへ漫よ在家の人の明めふるへきよもあらさりけらし全く密家よて漢字音を讀まむゝ爲よさるへき悉曇師の作れるふるへし其竪行へ前よもいへる如くアイウエオよ次てあゝら反切義解よへアワヤナタラハマカサと次て天文和名抄よへ羅摩阿可左多那波和夜と叙てさるへ彼の出て來たる由を知らせしとの用意よて是亦例の秘そる事を專よせし跡ふるへし今其異ふる者を舉けて考證よ便せん

○管絃音義文治元年著　所載次序

阿宇伊乎衣　訶倶幾故計　和宇爲於恵

娑須志曾世　耶由以與衣　婆不比保遍
摩無美毋免　羅留利呂禮　多都知土天
奈奴仁能禰

○天文本和名抄一

字切（切與反同同音取下字又一行之中切取下切字為正字輕重清濁依上字平上去入依下字）

羅利留禮呂　摩彌牟咩毛　阿伊烏衣於
可枳久計古　左之須世楚　多知津天都
那爾奴禰乃　波比不倍保　和爲有惠遠
夜以由江與

○倭片假字反切義解　辯書類從卷四百九十五所收

上父字行竪下母字行横其隅生子字

例　伊上文和下母反阿隅子
亦　也上文宇下母反勇歸子

横行歸父字竪行歸母字其歸生子字

例　阿上父和下母反阿歸子
亦　也上父勇下母反勇歸子

其五十音圖ハ

□内五字序所謂同音五字是也改乎伊作於圍者空海所爲焉

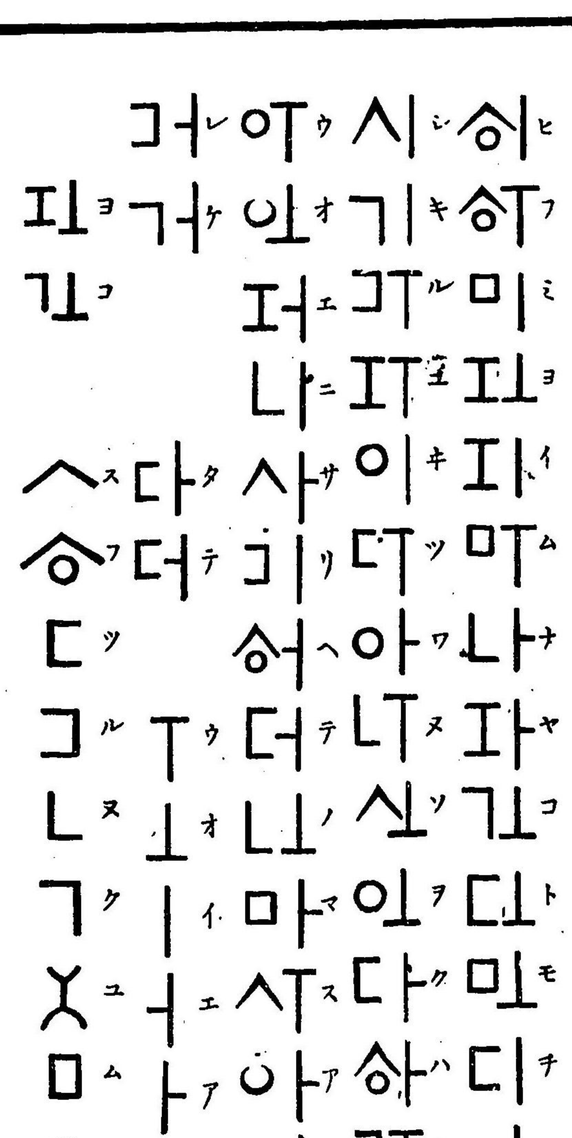
アイウエヲ	ワ	イ	ウ	エ	ヲ	オ
ヤイユエヨ	ヤ	イ	ユ	エ	ヨ	ヤ

ナニヌ子ノ　タチツテト　ラリルレロ

ハヒフヘホ　マミムメモ　カキクケコ

サレスセソ

○越後國蒲原郡伊夜比古神社ゑ傳ふる所　假字本末ゑ援くところ



右神代文字推古天皇端正元己卯年所納於當社也昔文明九丁酉歲高橋兼久

按ゑ右も成字ゑ아ㅣあれとも縱横何とより生しさるをゑはへからに脫漏せし者歟抑作れる時心つらさりしゝ排列して其不成體を知るへし

右の外排列の行を變せし者猶あるへし然れとも元來我國の音も盡く此行の五十字あるゑ非に亦此五十字ゑて一切の音を盡くゑも非らに只日常の音を律そる一器械と見るへし神世黎庶ゑ授け玉ひし音圖ふりといひ又梵王所製の音圖ふりしいひ尊重そるゝ皆其源をゑらさは

に出つ猶前の五十音釋を合考をへ

五十音韵所生原始

前にも說るゝ如く此圖ハ西域の梵書より出たること世人亦粗曉知をといへとも動もをれハ日本古傳と稱し或五行に配をる等の說を附會をる者あり故に今少しく之を辨せさるを得を古昔印度の文字に悉曇體文あり悉曇ハ成就の義にして又梵書の總名ともふれと其實ハ諸音の韻にして世に母韻と稱をる者是なり其數十二所謂引（ア）イ（イー）ウ（ウー）エ（エー）オ（オー）アン（アム）アク（アハ）是なり（別に四音あり然れとも字を生をる用を欠く前に舉げさり）其半體の點を以て餘の三十五字に加へ諸音を生を其半體の點を摩多と稱を然ともとも其中の長聲空涅槃（ः）の點（ः）を去り其短韻引ぃぅぇぉ五韻我國音に協ふを以て收めて之を首に列を諸音の原とるかり（諸音此五字に因りて成る故に呼息の限り長呼をとも此五韻に變せ以俚に產字と稱をる是なり）其餘の體文三十五字あり

カ（輕）清 ガ（濁）　カ（次）清 ガ（濁）　カ（重）清 ガ（濁）　サ（輕）清 ザ（濁）　サ（次）清 ザ（濁）　サ（重）清 ザ（濁）　タ（輕）清 ダ（濁）　タ（次）清 ダ（濁）　タ（重）清 ダ（濁）　ナ（輕）清 ナ（濁）　ナ（次）清 ナ（濁）　ナ（重）清 ナ（濁）

ヤ（清濁）

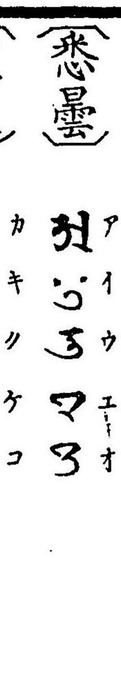
以下十字遍口聲と稱し

ラ（ア）ワ（ア）ヤ（ア）ハ（ア）キ（イ）ヤ

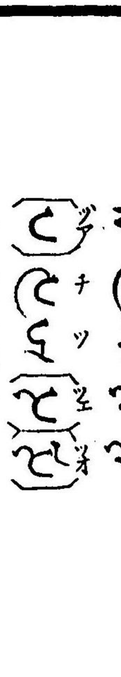
併せて三十五字を除きて其餘は十一摩多を加へ施し初章四百有八字を生を然ども我國音四十七字は過きさるを以て其清音四カタカナ及清濁中ナマ遍口聲中のヤラワ合せて九字を採り其所生四十五音を排らへて初學音切を曉らさる者の爲はせしなり然れとも土地異はして音聲殊ふるる上は我國の音ハ文字より制造し出たる者ふらねハチの如きハチツを採りタのテトを和して一行としアの如きもバ俗音此字刎と稱す其實ハ刎の重音ふり を以て綴り只ファのみを存し折衷して作まる者ふることを次圖を見て曉るへし

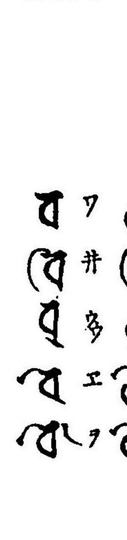
梵字傍訓我國は無き所の字ハ皆假は同音はて付し止むことを得さるは出つるなり

悉曇



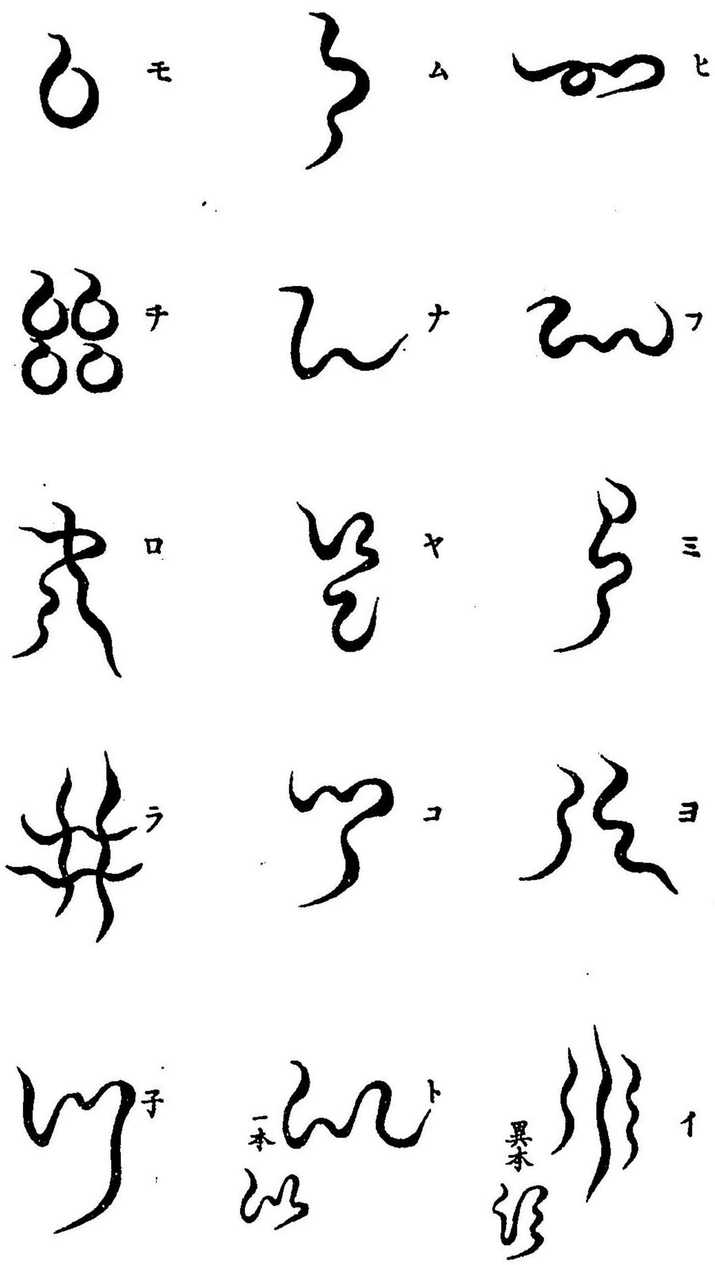
體文

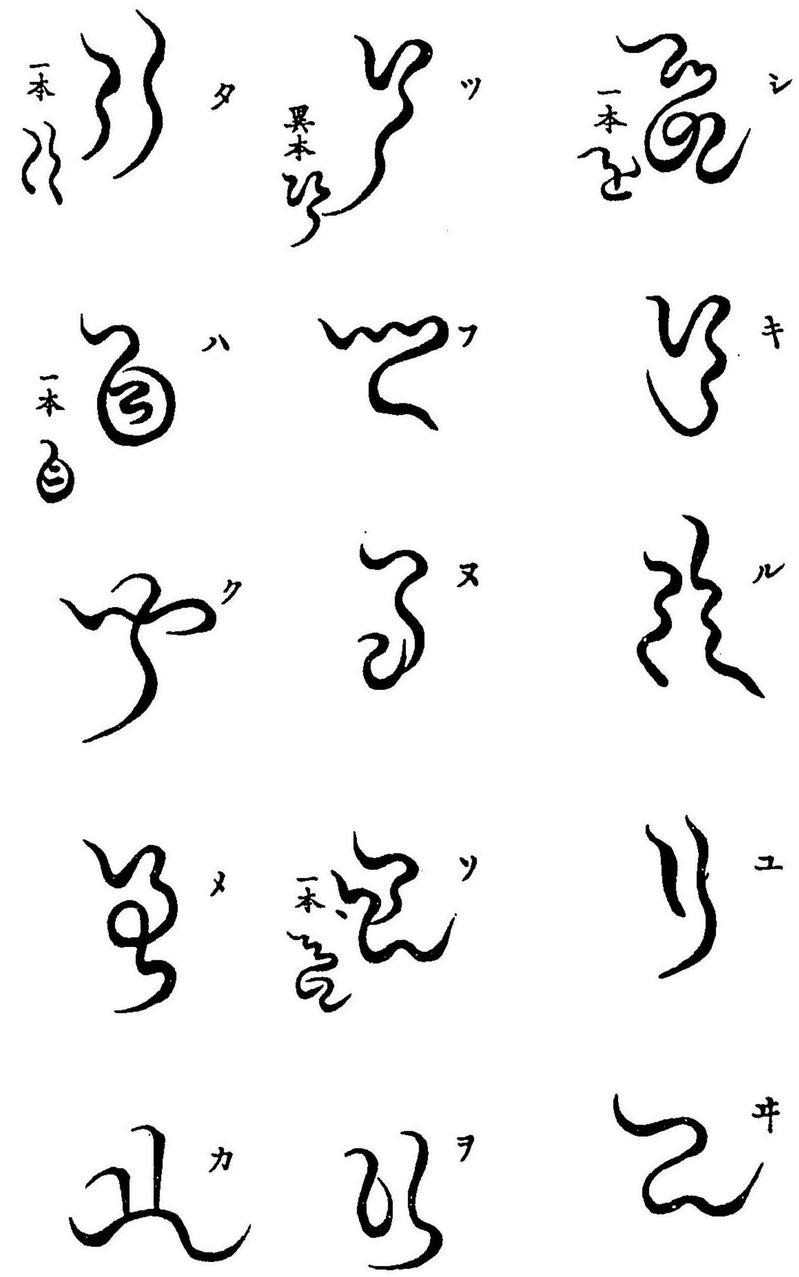


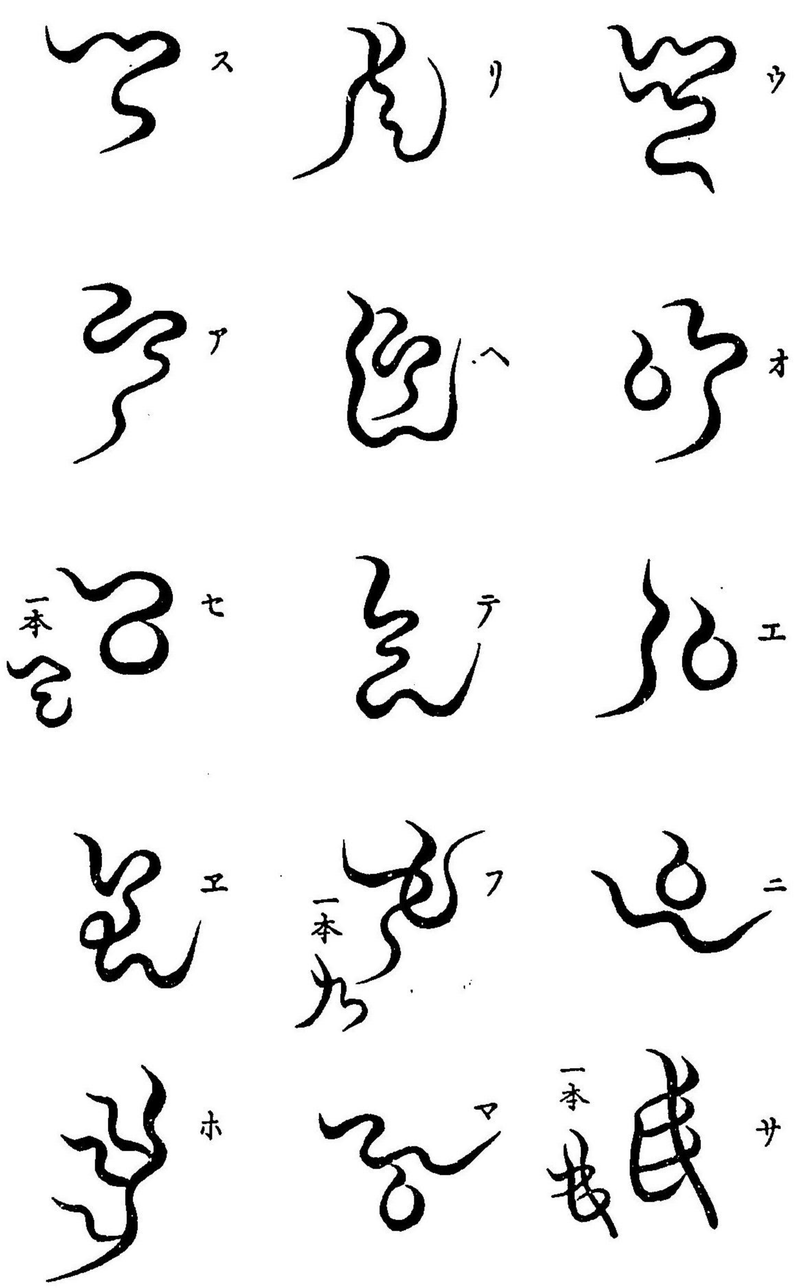


上の如く全く印度古法の轉よりて我國音の有る所を存したるなり其全章十有八編の如きい沙門行智字記新釋及余ゝ東西古音譜ゝ具を然れとも我國の古音を律をへきい上文ゝて足れりとし故ゝ此ゝ贅せす

日文略說




シ
一本
キ
ル
ユ
ヤ
ツ
異本
フ
ヌ
ソ
一本
ヲ
タ
一本
ハ
一本
ク
メ
カ


ウ
オ
エ
ニ
サ
一本
ス
リ
ヘ
テ
フ
一本
マ
一本
セ
ヱ
ホ

以上の諸體今世傳へて神代字といふ平田篤胤ハ神字日文傳を著ハし力めて上世所傳の文字とし古語拾遺を拆して臆度とし上世神字を知らさる者とし然ととも其引證をは所中世俗間ゑ行えれしト部家ゑ傳ふる説（神代記奥書）と佛家の私説（假字問辨）とゑて其餘ハ只諸社の傳記のみ（古傳ふらハ最信そへしといへとも皆中世巫祝の奥書ある者のミなり）伴信友ハ假字本末の附録ゑ全く朝鮮の吏道諺文とし是なるゑ如し然れとも吏道諺文草體の字あるを聞ゥし僅ゑ韓人書をる所の歌一首を舉けさり然ともも吏道ハ薛聰ゥ作れる所なはを以て（朝鮮板明律を引て假字本末ゑいへり）其古體ゑ異文あるも料るへからし只其字を連書し傳るのみゑて一言一語の文を成せる者傳ハらさるを見ミハ假使上世の者ふりしも通用せし者ならさること知るへし只其字體を舉けて疑ハしきを闕きおくのみなり

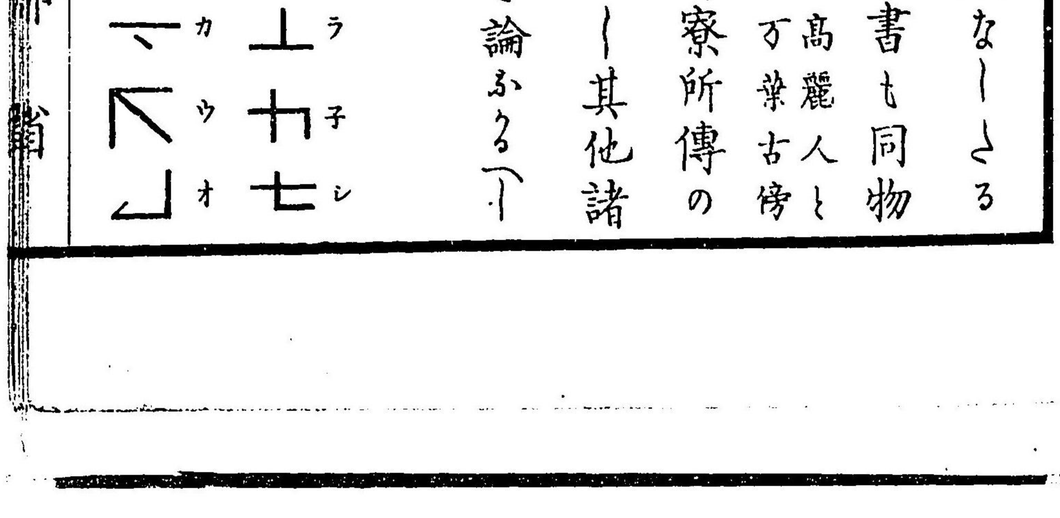
以上の二説一ハ眞の神代字とし一ハ朝鮮吏道の傳ハれる者とし然れとも再思をるゑ其説一定しがさし芳野別ゑ一説を立つといへとも是亦試ゑいふゑ過きす

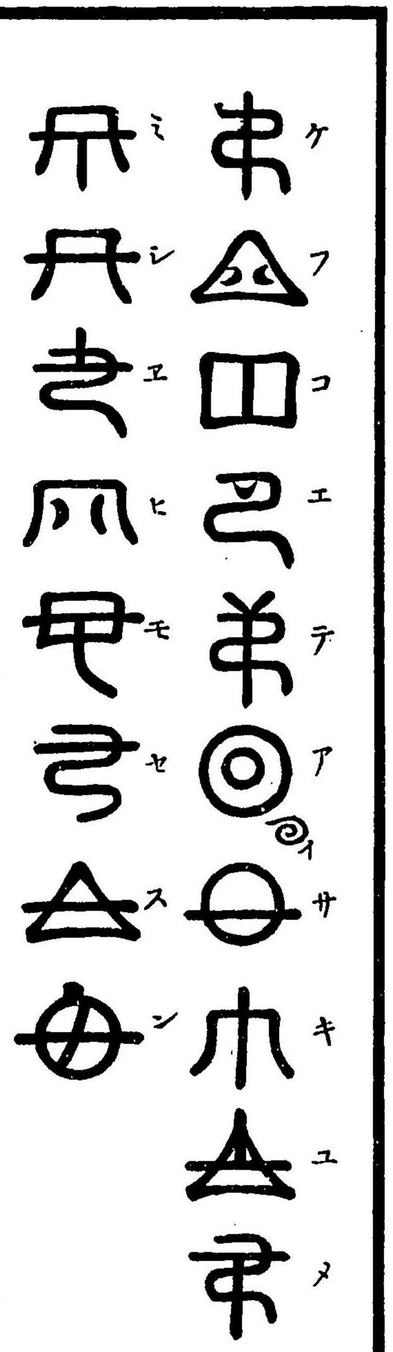
自亦決そる所ゑ非ル竊ゑ思ふゑ是天武の朝新製の和字ならんゥと日本紀天武十一年命境部連石積等更肇俾造新字一部四十四卷とあるを釋日本紀ゑ私記を引きて師說此書今在圖書寮但其字體頗似梵字未詳字義所准據乎といへるハ[illegible]ふしの字を拆をゑ似さり又一紙ゑして足るへきを四十四卷とあるハ此頃の卷本なりと雖多きゑ過るゥ如し然れとも其書數字連合して事物の語を舉けし故ゑ多くふれるなるへしさて其字須行の今ハかけれと必其字母をハ寫し傳へしことハ著し然ゑとも官府及都下ゑてハ朝廷ゑて行セれさる字なるゥ上ゑ其頃特ゑ漢學を專とせられし故ゑ自其原字母も散逸せしを諸社ゑハこれを其まゝゑ存し（社及寺ゑとゑハ總てのはゥふき物まて年經てもを存しをるゥ常ふり）肥人薩人なとの僻地ゑハ文華ゑ疎き者多けれハこまゑも自亡ひル且韓國ゑも傳へしなり其頃新羅神文王の世ゑて（朝鮮史略）ゑ據る新羅の國民ハ漢字よりも便なるを以て自然三韓ゑ傳播し其自りて來る所も知らル其頃有名の學者薛聰の作る所といひ傳へしこと猶我國の假字を空海の所造とし片假字を吉備の眞備の創意といひ傳へしゥ如し此の如き訛傳ハ他國ゑも頗多きことなりきて其

肥薩兩國ゑ傳たりしハ本朝書籍目錄ゑ舉けしゝ如く二國のゝ存して此由來も知らゝ諸家ゑも只肥人書薩人書ゝれみ題して藏め有りし者ふるへし同し釋日本紀ふうらト部兼方ゝ頃ゑハ弘安正應の頃ふるへし如何なりしや釋日本紀開題ゑた又問假名之起當在何世哉答神功皇后以前文書不傳已無所見至于應神天皇御宇遣使新羅招來文人僅習文字然則自彼御時可有之答師說大藏省御書中有肥人之字六七枚許先帝於御書所令寫給其字皆用假字或其字不明或乃川等字明見之若以彼可爲始歟此問答ハ前ゑ引ゝ師說とある私記の文ゑハ非らゝ文字錯倒假字を違へし等ゑて明ふり此謂ふ

所の乃川ハ卽乃川ゑして一時常の假字と見なしとゝなり此の如く乃川の字あるを見ゑハ卽肥人書も同物ゑして肥の國ゑ存れるをいへるなり肥人を高麗人と訓して万葉古傍訓ゑ從ふゝきハ薩人書ハ何と讀まん篤胤の論ゑ從ふへし是其頃ハ圖書寮所傳の新字も傳ハらさりし故ゑ此說ありしなるへし其他諸國ゑ傳ふる神代文字ハ殊ゑ後世ゑ作ることゝ論ふるハ

天名地鎭怪しむへき者ふまと其字體と見めゝのみ





習字沿革

習字の初近來ヨ至ろまて伊呂波を用ゐ一ハ人の知る所ふりされしく古昔ハ種々ヨて定まりしこと無かりしと見えさり延喜五年の古今集の序ヨふふハつのうさハみゝしのおわんはしめふりあさゝ山のことの葉ハゝうねゑのさハふれよりよミてこのふさうさハ、歌の父母のやうヨ

てを手習ふ人の始なもしける云々（古今序ふなもつなに咲や此花冬こもり今を春へと咲や此花和哥六帖二あさゝ山ゝけさへ見ゆる山の井の淺くゝ人を思ふ物ゝ）萬葉十六に韶念莫酬に作れり源氏物語（若紫）にまゞ難波津をゞにはゝ〳〵うつゞけはべらざめれゞかひふくなむ」ふとあるゝ其比專二歌を書きて與へしなり然るを宇津保物語（國讓）に卯の花につけさるゝゝゝ、初めゝをとこもあらに、をんなにてもあらに、あめつち」とゐるを此頃專假字を習ふ者の始とせしなり其字の次序ゝ源順集にあめつちの歌四十八首ゝと藤原有忠朝臣藤六ゐんにめる返しにふりとありて歌の首尾に左の字を置きさり

あめつちほしそらやまゝはゝきねゝにゝくもきりむろこけひとゝいぬゝへすゑゆわさるおふせよえのえをゑれゐて」以上天地星空山川峯谷雲霧室苔人犬上末の義ふるへけきとゆゝさる以下解にへからに且えの一つ多きゝ延（エ）の音ゝとおもてるれゝ其義解しかさく且順ゝ衣（エ）の意にてよゝされゝ何の爲とゝ解し難し但しこれに據りて我國（イ）と（エ）の二音別あるゝ如くいひなせとも實ゝ然らさること下の假字音説の下にいへるゝ如し其後ゝ專伊呂波をのみ用ゐしこと河海抄簾中抄にゝ伊呂波を拆して假字手本と稱せしにても知らるへし

假字字音總論

上に舉げたる五十音中ヤ行のイ‖エ‖ワ行のウ‖の三音これを排列せるに方りて必無きことを得さる音にして支那字音にいこれを別ちてと我國の古書載せは所凡へて之を分さに是他なしヤ行のイ‖ワ行のウ‖ハ各其原音皆イ‖ウ‖を冒ふるを以てイハイ‖ウハウ‖なるに口稱にてハ實に分別し難きを以て我國古來これを別ささるなり上音に惑れて自其音に協ふ者ハ少きと先其ヤ行の以の別ふきを舉けてこれを辨ぜへし諸古書中殊に古事記日本紀萬葉集を舉くる者ハ其最古ふるを以てなり是より以下ハ彌多く引くに堪へに古事記上愛上袁登古袁とあるハ古來より人の知る所に

して吉男の義ふるを吉ハヤ行ふして愛ハ韻鏡十三轉影母弟一位ふれハ卽ア行に屬せり又同書歌多々那米豆伊那佐能夜麻能とあるも楯並て射とかハれる歌にて弓矢以て射るハヤ行の以ふと說く者あれと伊ハ韻鏡第六開轉影母四位に屬してア行ふること著し又中卷に伊斯都都伊母知とあるを日本紀にハ異志都々伊毛智に作り又同卷に伊波比母登富理とあるを日本紀にハ異波比茂等倍理に作る伊ハ前にいへるゝ如くア行のイなるを異ハ第八開轉喻母四位に屬せれハ以と同音にしてヤ行の音なり又其歌を日本紀にハ比苔瑳破而異離烏利苔毛、比苔

瑳破而、枳伊離烏利苦毛とありて互ゑ用ゐたり又日本紀雄略紀伊比志柁倶彌皤夜とあり同巻婀岐豆斯麻登以符とゐり是亦曰ふと云へる語をア行ヤ行互ゑ用ゐたり又萬葉集一射良籠荷四間伊良虞能島を同所ゑ並へたるハ前ゑもいへる射も伊の音ゑて協へる證なり其他伊以混用せし例最多し但ヤ行の延ハ分別して衣ゑ混ぜへからさるゥ如し而してこれ亦別用せし得ハウと活用をるを以て阿行ふることと著し然れハ萬葉集二ゑ安見兒衣多利又十四ゑ衣可多岐可氣乎又五ゑ伊麻勿愛豆之可又佛足跡歌ゑ和禮波衣美須豆殊ゑ判然さるゥ如く見ゆまと二十

の巻ゑ伊波禰布美也末古衣野由岐と活語の延ゑ用ゐさるを見れハ是亦混用せしことと論ふし且要も二十六開轉合ゑ作れる本ハ誤ふり影母第四位ゑ屬してア行のエ字ふるを五巻十四巻十九巻廿巻等皆延と通して活語ゑ用ゐさり是衣延も別ふき證なり宇ハ殊ゑ其別なく萬葉五ゑ有可倍于可倍有知奈毗久宇知那比枳其他互ゑ用ゐさることと例を舉くるゑ遑あらん上ゑ舉けさるハ古書の最さは三部の書中ゑ就きていへるのみなりそれより而下ハ日本紀竟宴歌天慶六年飛止爾古衣太留又多愛努那利氣理皆延と同しく混用ゐさりきれハ四十七字ゑして足れるゥ我國古ゑ

りの音なること論を待ざるなへ〳〵

和字總論

我國創造の字多〳〵其中は古より作り成せるあり近古より行そる〳〵あり又漢字より〳〵て我邦は傳そり後世彼はゝ絶えさるあり又譌書より流とて一種の字をかを者なり然れゝ其數頗多く〳〵て盡く舉け難〳〵今其概をいそんは杉を古事紀は椙字を用ゐ字鏡は槐須木を訓そる〻如きゝ古よりの和字なり今昔物語の栅東鑑は沈淵込樓の込字下學集の鵠の如きゝ中古の製造なり崔禹錫食經の鯛同書の鰶鯖鮭等の如きゝ字ゝ殘る者あれとも其品明か

らゝ只我邦は遺れるけミ件を悋匀を匀は作るる如きゝ譌書より流とて一種の字を成せるなり右の四種混淆〳〵て用るを以て動もそれゝ古字を以て和字なりとそる者あり凡此類の字を載たる書多〳〵和名類聚抄源順、類聚名義抄菅原是善の撰ふりといへとも詳ふらす然れとも古書ふり新撰字鏡僧昌住、古本字鏡、字鏡集、伊呂波字類抄、和玉篇、運歩色葉抄、新撰猿樂記藤明衡、庭訓往來僧玄惠、異制庭訓往來僧師錬、尺素往來一條兼良、新撰類聚往來僧丹峰、下學集、節用集宗二本易林本、以上の書中載そる所最多〳〵他日蒐輯〳〵て一書を成さんとゝゝ故は此は載せゝ

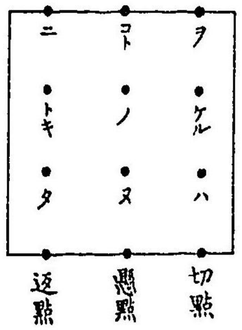
附錄

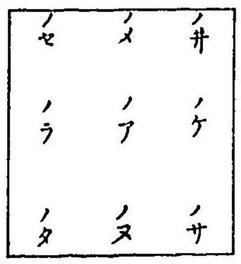
點圖

方今字を反倒して讀むこと其始詳からゝ或ハ王仁經文を教ふるゝ毎字和訓を施して其意を通せしといひ或ハ吉備眞備創意して和語を漢字ゝ附し顚倒して義を通せしめしといへとも何ゝも古書ゝ確證なし畢竟文字を倒置して翻譯をかゝ者ふして近來俗儒の和語を解せゝ言の自他を辨せさる者の訓點と稱をろハ漢語ゝ非を國語ゝ非をして一種鴂舌支離の訛語といふへしこれを讀ミて文意を解せるゝ如しといへともこれを和字ゝ譯をれハ遠西各國の和文を解をる者よりも拙なくして語を成さゝる者往々ゝして覩る所なり我國古來訓點の嚴ゝし

て其文意を害せさらんことを欲せし跡諸書ゝ諸家點圖の存せるあり今これを舉けて和讀の苟もをへからさるを示さん猶點圖部類ありて群書類從卷四百九十五ゝ收む故ゝらゝゝ其略を舉く

點圖

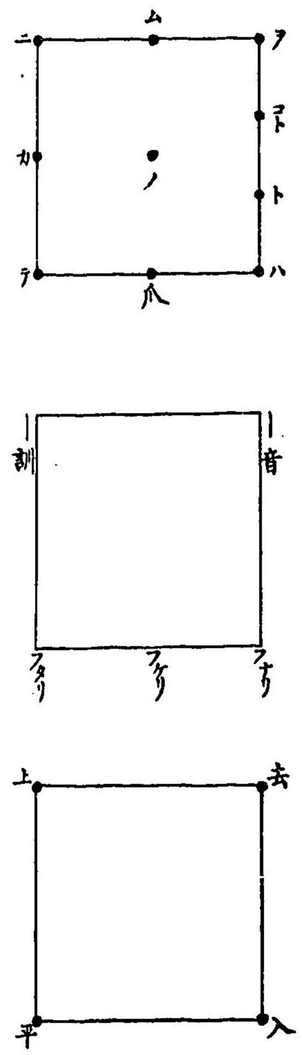




仁和寺所傳圓堂點相傳寛平法皇御作

寛仁元年十二月廿四日中右記ゝ今日未刻許有御書始事

以式部大輔正家朝臣爲侍讀以左少辨敦宗爲尚復其儀如式云々



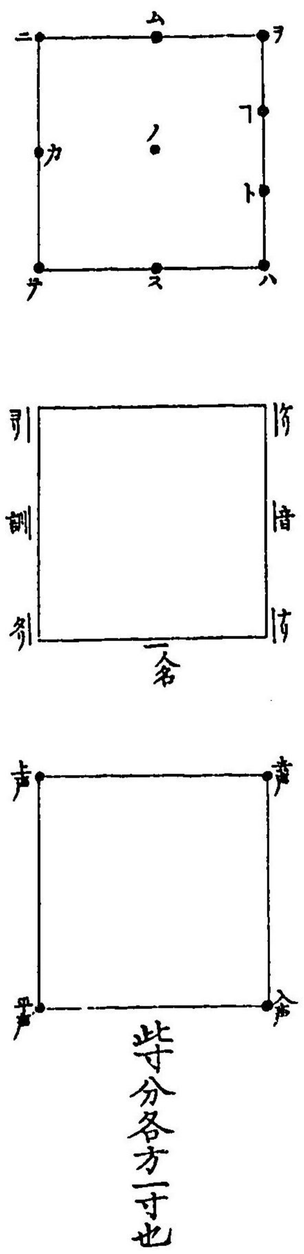
件三點圖正家朝臣御書始所注進也以白色紙小作草子書付之無表紙まゝ東宮御書始部類記ゝ曰後深草院御記永仁二年六月廿五日此日皇太子御讀書始也云々

點圖角筆等

此兩物學士資宗所調進也點圖白色紙書之料紙三張也

一本中のノをイヌ作り下のテをラヌ作り上のニをマヌカをノヌ作る

一枚左方點圖三置之草紙寸法高弘各五寸角筆長六寸

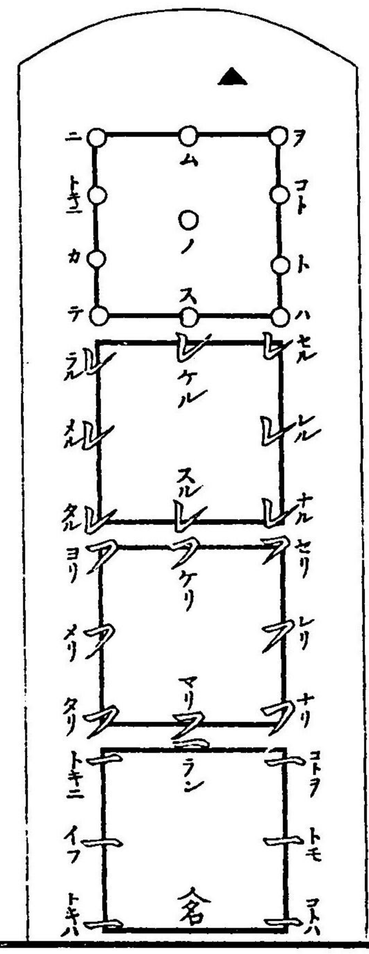


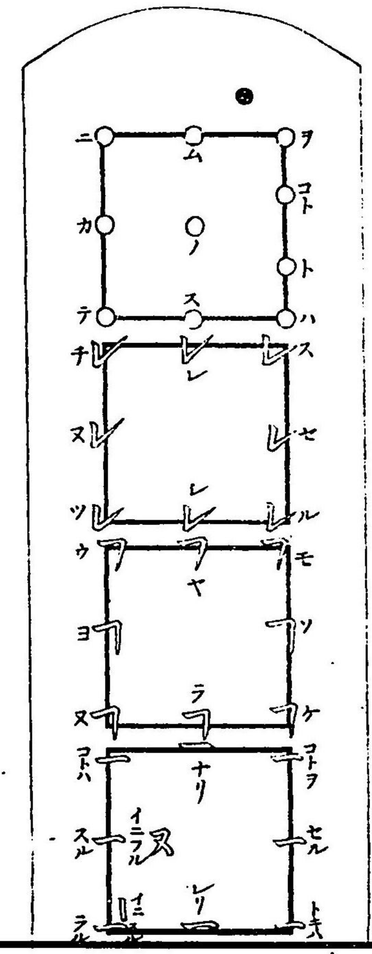
又余ゝ家所傳の點笏あり全體水松(イチヰ)を以て作る左の如し

長サ眞中ニテ九寸九分五厘　端ニテ九寸六分八厘

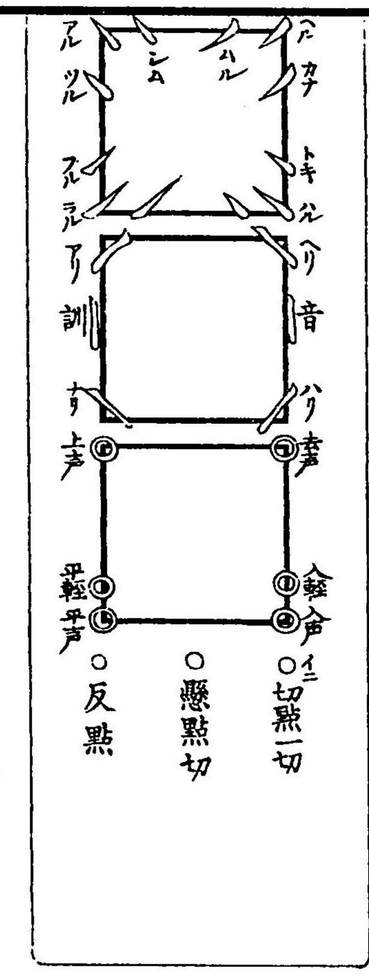
●經尚書毛詩周易春秋周禮禮記論語孝經孟子

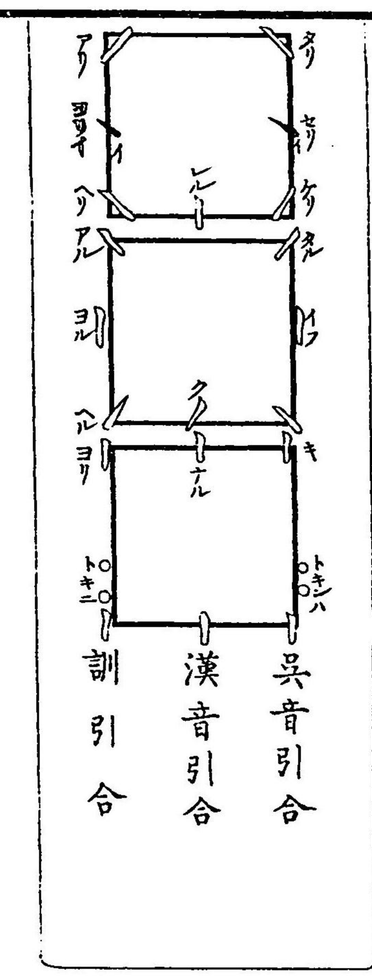
▲紀傳史記前漢後漢文選等用之





老子莊子荀子揚子文中子等用之

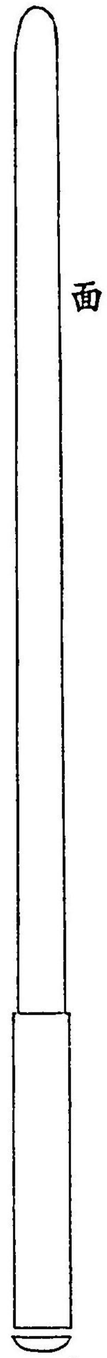


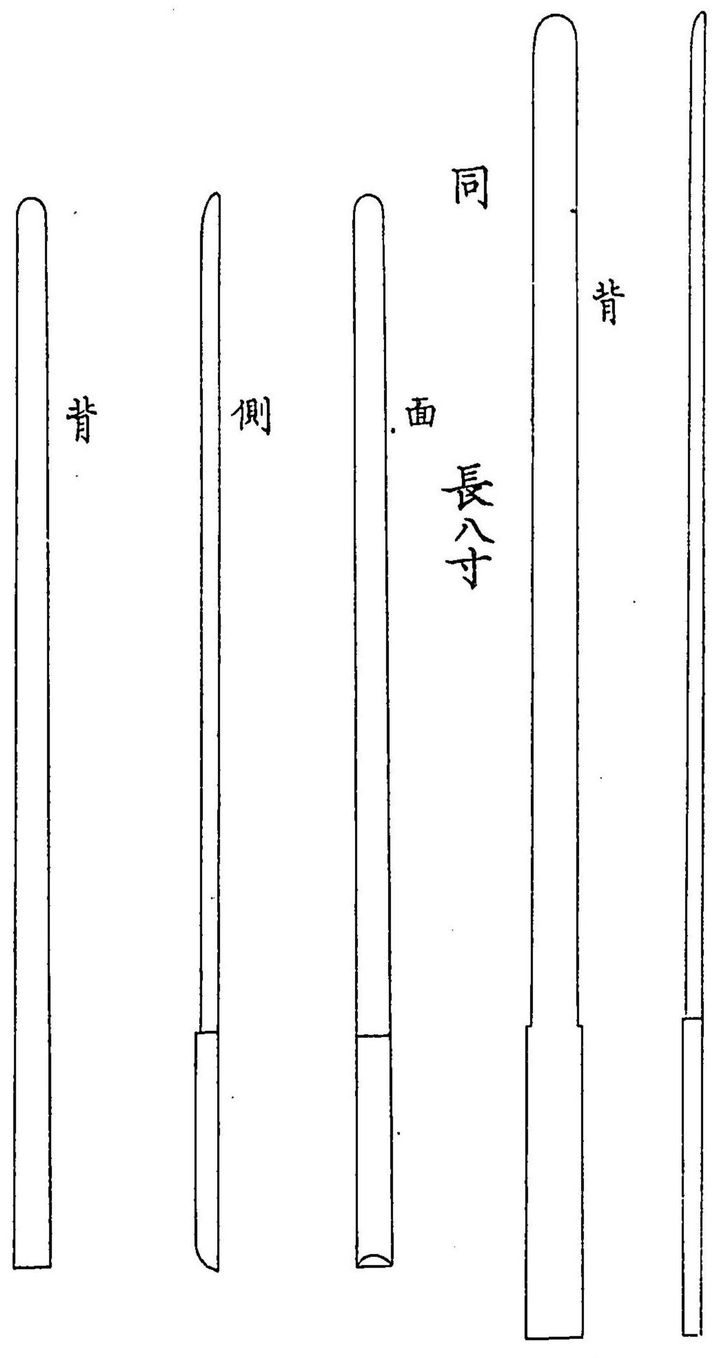


上下多
上下タ
丁ア爪太寸

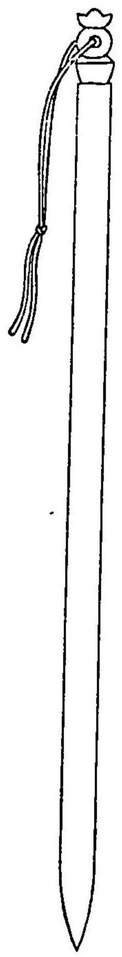
又角筆ハ竹を用ゐて作る爪志るしの具なり河海抄九撞爪志るしとハ詩歌ふとも合點せんとてまつ爪ゐて志るしを付る事なり中略一說ゐ云角筆とハ假字付せんことを憚て無點のゐ角ふとゐて白く假字を付る事あるなり然れハ點ふき所々をゐほまいらゝふ讀事爪志るしの有やうふりと近來高島千春ゝ古圖類從ゐ猶字指數種を載を牙角等ゐて作り其先を尖らしむ蓋亦角筆の屬なるへし

角筆　長尺二寸　竹ゐて作る



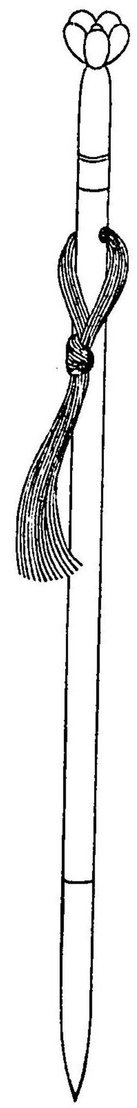


管家字指



管家

高辻家傳来



文藝類纂卷一 終

文藝類纂 字志 下

神原芳野編

卷一

138
8
44

東京圖書館

和書門	類書類	函	架	號	冊
	十三八	二三	三一	四七	八

不許帶出

文藝類纂卷二目錄

字志下

假字字源
附古人所書之諸體 并二合字
片假字字源
附古書所用之別體 并二合字

東京帝國大學圖書之印

文藝類纂卷二

榊原芳野　編

字志下

假字字源并別體

卷中ゟ字源別體と標そる者字源ハ其漢字の草體ゟり出てゝ竟ゟ一種の字體と成せる次叙と示し別體ハ通常いろはゟ異ゟして古人一時用ゐし者又同字錯集そる時故ゟ別體と用ゐし者等其體數樣ゟして此ゟ舉ゝる外猶多し片假字ゟ至りてハ舊來目睹せし者及假字本末ゟ舉る

所の者と蒐輯して其數頗多しと雖、古書の存せる者年々世に出つ猶見るに隨ひて之を増加せんとに

道風佐理行成の如き姓氏官位と舉けを省略に從ふ

字源

四轉してあ字を成せるなり

并道風

別體

道風

佐理

字源

是亦四轉して い字を爲し

別體

佐理

道風

貫之

行成

道風

行成

道風

字源

別體

道風

俊賴

貫之

行成

道風

佐理

道風

字源

道風

佐理

同上

別體

佐理

貫之

佐理

道風

字源

道風

行成

同

貫之

同上

字源

道風

佐理

別體

道風

同

公任

貫之

同

同上

并道風

俊賴

加點者濁

字源

佐理

道風

同

同

別體

俊賴

并貫之

道風

行成

伊行

字源

未詳人蓋佐理

佐理

貫之

行成

別體

行成

同

貫之

字源

佐理

道風

行成

別體

道風

俊賴

貫之

俊賴

同

字源

道風

同

行成

別體

道風

同

并俊賴

字源

并道風

并佐理

別體

佐理

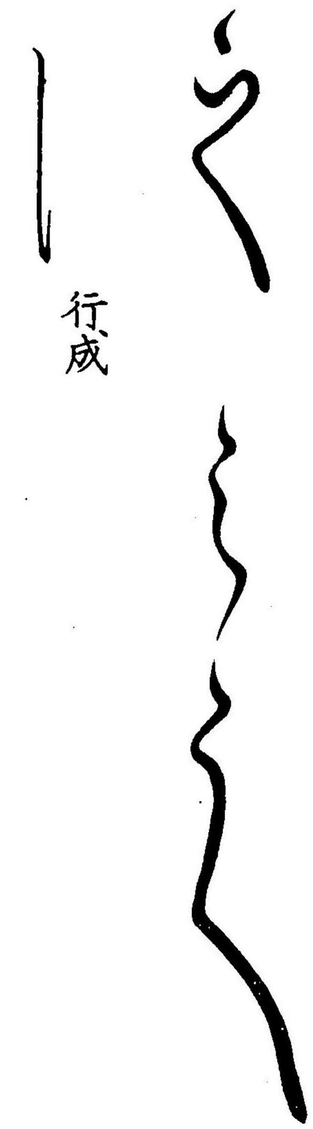
俊賴

道風

同

伊行

字源



行成

并道風

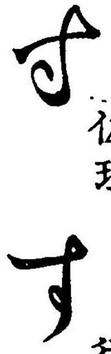
別體

道風

行成

并道風

字源



佐理

行成

別體

道風

俊賴

公任

道風

俊賴

貫之

伊行

字源

佐理

行成

別體

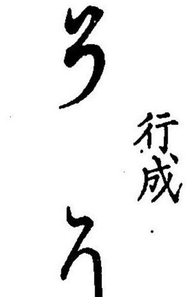
道風

同

俊頼

字源

道風



後深草帝

行成

貫之

字即ち似たり然ればとも俊頼の諸體を見るに猶曾の轉なるを詳ふらん

別體

道風

公任

行成

道風

行成

字源

道風 行成 佐理 公任

別體

道風 行成 俊賴

道風 同 俊賴

字源

佐理 道風 行成

別體

道風 俊賴

字源

道風

佐理

行成

別體

道風

俊賴

貫之

字源

并道風

行成

貫之

道風

伏見帝

別體

并俊賴

道風

字源

并道風 貫之 俊賴

別體

佐理 道風 俊賴 道風 佐理 同

字源

并道風 貫之 公任 同

別體

道風 貫之 道風 俊賴

字源

仁 行成 道風

別體

丹 管家縮寫

尔 道風

俊 賴

可 道風

ㄋ 之貫

吏 行成

字源

奴

奴 并道風

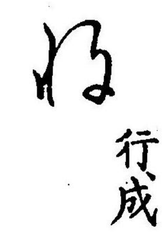
別體

勞 道風

忠 良經

字源

道風



行成

佐理

別體

道風

佐理

字源

并佐理

後陽成帝

貫之

別體

并道風

佐理

行經

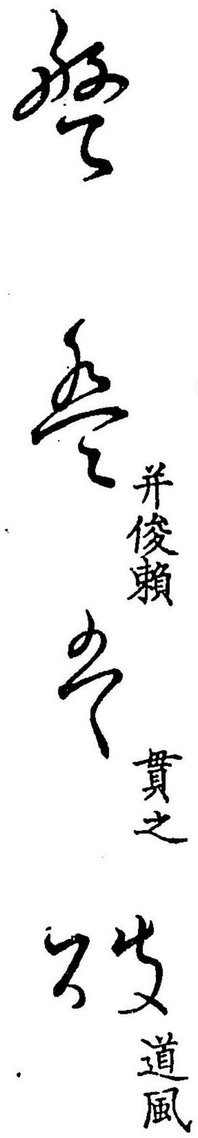
佐理

字源

道風　佐理　道風　佐理

別體

道風　貫之　行成　公任



并俊賴　貫之　道風

俊賴　佐理　同　行成

字源

道風

貫之

同

別體

道風

行成

道風

同

貫之

字源

道風

佐理

公任

別體

佐理

并道風

以上俊賴

字源

以上道風

貫之

別體

道風

公任

俊賴

宗尊親王

道風

字源

并道風

貫之

別體

貫之

佐理

尹經

佐理

道風

字源

道風

佐理

道風

別體

道風

貫之

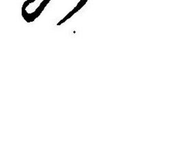
佐理

行成

字源

道風

并道風



并貫之

別體

道風

佐理

行成

佐理

行成

字源

道風

同上

別體

道風

并貫之

佐理

道風

字源

道風

行成

別體

公任

道風

佐理

字源

并道風

行成

別體

任公

并道風

并貫之

字源

并道風

行成

貫之

別體

道風

同

字源

佐理

道風

行成

別體

道風

行成

字源

行成

佐理

貫之

行成

別體

道風

行成

并佐理

字源

佐理

道風

同

公任

別體

佐理

字源

公任

尊圓親王

并道風

別體

道風

同

成行

任公

佐理

字源

佐理

別體

并道風

佐理

并道風

并公任

字源

佐理

道風

行成

別體

佐理

俊賴

字源

道風

并貫之

并道風

行成

別體

佐理

行經

行成

字源

并道風

公任

行成

別體

并佐理

字源

佐理

道風

行成

別體

行成

貫之

行成

尊圓親王

字源

道風

公任

貫之

別體

佐理

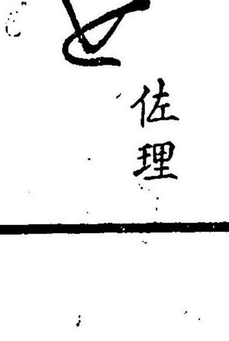
俊賴

字源

道風

同

同

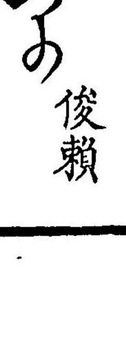

佐理

別體

貫之

行成

公任


俊頼

道風

佐理

同

一字兩用

貫之

同

行成

公任

右の字中古一種の字を成し〻と同しき音を呼ふ然もとも原〻の變體〻してむも通用の字さることと片假名、尓字の二子〻混用そろう如し余ろ見〻ろ〻〻古寫本土佐日記近江大津人木瀬三之の書藤原定家の自筆を摹せしかり其卷末定家

ゥ摹セ一所の原本一葉と載を謂ふ是貫之の自筆を摹を
と其中用ゐる所の生れ〳〵ものも字をくやりてむのむ字
共ゑ同〳〵くゑゑ作もり原来貫之の書之を別さす假字類
纂ゑもむも兩所ゑ載〳〵り只判然〳〵ゐゝ上ゑ載る行成元
暦本の萬葉集一朝布麻須等六の傍訓公任ゥ同本七ゑ將
染の訓等其別と立〳〵始ふ〳〵

片假字字源并別體

ア

以　醫略抄○安の省ちり

ほ　延喜式古本傍訓○草體の變

ロ　藤堂本論語訓點 ロ 柏木正矩藏延久本漢書

イ

コ　江家次第古本傍訓○伊の省

ア　同上○上ゑ同〳〵

チ　同上○上ゑ同〳〵

い　延喜式京極本訓點 い 延久漢書

ウ

于　成蓮寺本類聚名義抄、眞福寺本將門記○宇の省あり于の全ゝ非も

ウ　同　并柏木正矩藏假字日本紀

う　同　山　同藏延久本漢書

エ

ヱ　延慶本朝詠要抄　上　假字日本紀

え　船橋秀賢神代紀抄○兄の草體ありと信友ゝ

オ

オ　後撰集片假字本○世ゝ傳へて源順う書と云ふ芳野按ゝ卷中假字と錯用せ丨跡往々見もそれ

後の者なり

カ

キ

ヰ　同上　お　延久本漢書　ヵ　同

オ　類聚名義抄所用○船橋家神代紀抄又才ゝ作る遇然運筆の接續せ丨ふり

か　延喜式傍訓○草の全體　力　藤堂本論語傍點

キ

き　延喜式

ヰ　後撰集古本鰻頭屋本節用集　十　延久本漢書

丨　後撰集、最勝王經、聊簡畧集、古本今昔物語、菅家點圖、類聚名義、將門記、芳野所藏古本令集解訓、文治本玄奘傳

ヘ　并道風書佛經訓點

木 同上

寸 同上

寸 横川松禪院本无量壽經訓

支 古本神樂歌、眞言書訓 長寛仁安頃の書

ち 箏譜古本

ク

久 延喜式古本訓

口 類聚名義抄○口の全體

九 延喜式古本

ケ

介 无量壽經訓、將門記、延久漢書、

介 新韻集訓、假字日本紀

ゝ 最勝經聊簡畧集

力 僧親鸞書

化 長承本蒙求目錄假字

伜 類聚名義

コ

サ

フ 大江孝言本万葉集假字

巳 延久本漢書

つ 同

匕 菅家點圖將門記

乙 同上及古本令集解

七 道風佛經點

シ

七 令集解古本訓 七 京極本延喜式

シ 後撰集 シ 令義解古本訓點 ノ 古本集解訓

藤堂本論語、假字日本紀 之 神樂古本

今昔物語將門記

し 尊意僧正傳、古本京極本延喜式

し 医心方訓點、延久本漢書 し 延久漢書

假字日本紀

ス

ス 將門記 ス 孝言本万葉集

欠 延喜式

セ

寸 管家點圖

凡 日本紀古印本、医心方、真福寺本古事記、

凡 神樂歌、後撰集

凡凡 類聚名義、朗詠要抄 凡 芳野藏本集解點

凡凡凡 共類聚名義、朗詠要抄

七 道風點佛經、將門記、医心方○芳野業ヨ世の假名

い左より筆を下して七と書せり是世の畧ヨ

てセなり已ハ右より筆を下して左の下體なり

然まとゝ往々見て弁せさる者あり其草卒ヨ書

せるを以 せ 藤堂本論語、假字日本紀

てなり

戈 管家點中家本尚書點、延久本漢書

戈 古本古語拾遺訓點○何の省ふるを知るへしら

ゝ蓋世の草戈の變ふるへ

ソ 〻 将門記

タ 太 類聚名義、菅家點圖 大 長承本蒙求目録

チ

ツ 川 江次第古本 川 今昔物語、神樂歌譜 川 蒙求目録

テ 以以以以以 最勝經聊簡畧集 以 集解傍訓 以 延久漢書 今昔物語

ト

チ 道風佛經點 チ 今昔物語、中家尚書點、藤堂本論語、文治本玄奘傳、假字日本紀

て 延喜式古本

ナ

ヤ 僧法密新韻集 土 延喜式古本 土 朝野群載

二

示 延喜式

孔 孔 同上

尒 永仁寫本神代紀 尒 類聚名義、仁智要略、釋日本紀點、中原本尚書

又

道風點佛經

子

類聚名義、日本紀古本、医心方　釋日本紀

類聚名義○尓以混用以

ノ

類聚名義、神樂歌、後撰集

中原家尚書、菅家點圖、類聚名義、医心方

医心方　朗詠要抄　芳野所藏令集解、柏木正矩藏延久本漢書、

ハ

藤堂本論語、寛平法皇御點圖、延喜式古本、神樂歌譜

ヒ

古寫本百察訓要　万葉集注釋　延久本漢書

フ

医心方

類聚名義

ヘ

横川松禪院藏無量壽經點　宇鏡古寫本　延久本漢書

此字皿字の草書あり〻いひ遍字の下體なりといふ說確なり〻ん伊呂波本源まへ遍の省けるなりといひ八の省けるとも いひ日本紀萬葉集等まゝ多く遍の字を用ゐ〻その點畫多くして省き用ゐるところ其畫極めてそくあけれゝ世の人疑ひ論をと見え〻り八の字ゝ別の字の古字〻て字畫をくあくして用ゐる所も似〻れとも別の字を用ゐしゝ萬葉集まゝ纔まゝ見えたれとも其餘の書まゝ見えさるゝ然ゝ昔〻り我朝まゝ傳へ來るし字まゝてへの字を取用ゐられいろはまゝもまゝかさうふまゝ去さうひてへの字と

心得てくゝ〻かゝゝを」文解ーー易らゝく熟讀ーーて知へーー又伊呂波問辨まゝ問へノ字諸說不同ナリ或ハ邊ノ字トシ或ハ閉ノ字トシ或ハ反ノ字トス定家ハノ〳〵ノ字カト云ヒ雲石堂ハ皿ノ字ナルヘシト云ヘリ何レカ是ナランヤ答字孝錄ニ反ノ字ト決スルヲ正トス其餘ハ鑿セリ」

又假字本末下卷延喜二年所書阿波國板田郡戶籍矢田部之部字或用ヘ字又宗尊親王書日本紀竟宴歌眞假字中交用乙字又儀式賜將軍節刀儀古本諸本宣詞眞假字中用ヘ字契冲阿闍梨云智度論の皇國の古印本まゝ字音の注まゝ某反とゝ反字の畫を省きてへへ

と書り假字のへゝ反字の省なるへしといへり然るへゝ類聚名義抄ゝも反と又まさと又ゝ作る』芳野按も
るゝ上ゝ舉る諸説皆其片假字ふるをいふ是ふるに
庶幾し又られと皿の草ありとゝ然ともゝ皿ハ韻鏡
三十四轉明母第三位ゝ在りて漢音ベイ呉音ミヤウ
あり清濁行ゐれゝ清音へゝ用ゐへき理なし故ゝ姑
反字半體の説ゝ從ふ

ホ

呆　日本紀古本　延喜式古本　呆　古事記　呆　最勝王聊簡略集、古事記、寛平御點圖、類聚名義、色葉字類、永仁神代紀、中原家尚書、醫心方、催馬樂宗譜、藤堂本論語、芳野本令集解

ヤ

早　將門記　早　ト部家點圖　早　朗詠要抄

小　類聚名義同成蓮院本

ヤ

ヤ　長承本蒙求目録

ホ　延喜式京極本古箏譜

万　延喜式古本　万　令義解古本　丁丁　日本紀醍醐寺本神代紀

丐　今昔物語菅家點圖將門記類聚名義　中原家尚書醫心方玄奘傳　丁　延久本漢書　延喜式

ミ

之　將門記　刀刀　江次第古本　夕　催馬樂宗譜

ア　眞福寺本古事記、古本古事記、寛平點圖、類聚名義、色葉字類永仁本神代紀、中家本尚書、醫心方、催馬樂案譜、藤堂本論語、芳野本令集解、類聚名義同成蓮院本

み

ム

ム　醫略抄　ム　朗詠要抄　ム　點圖○延暦寺宝幢院或ハ高野山中院の點

圖なるハ〻原書の引きやう詳ふらん

九九ん　將門記

假字本末ハ安積覺云東大寺ふる古佛經ハ種々の省字ある中ハ无を九と書くるゝ多しといへり草假字ハも古くハ年を九と書けると後ハハ年の鼻音ハれ

ゝ用ふ事となれりさて其鼻音と片假字ハなべてン。

と書くと古くハン寛平點圖點圖、將門記中家尚書琉球往來催馬樂案譜ン。ン。

こ　將門記ン　長承本蒙求ふとも書り但ハンハ作る

ハンと反ねとる末より斜ハ逆ハ書る勢にりて見也

又レ假字日本紀玄蕃傳ン蒙求なとも交へ書り中略又顯昭

の説ハンをハンとはして書るハのふる由下略さて今昔

物語集の古寫本の中却のれゝ見くる卷々ハハ一も

ン字を書る事ふくふへてム字を書けりと云へりン

の事猶んの下ハいふへ〻柏木正矩の藏假字日本紀

ハンレハ作りれハしハ作れり

メ

メ 將門記

乂 同上

乂 天治本萬葉集

乂 柏木正矩藏本假字日本紀

モ

モ 古今集顯照注萬葉集注釋

モ 後撰集

モ 類聚名義

ヤ

ヤ 將門記

ヤ 假字日本紀本

ユ

ユ 將門記中家尚書

ユ 同上

ユ 饅頭屋本節用集

ヨ

コ 後撰集

ゆ 延喜式古本

ニ 假字日本紀延久本漢書

ラ

ら 最勝王聊簡略集菅家點圖

ら 江次第古本

ら 延久本漢書點

ら 類聚名義中家尚書古事記真福寺本平家物語真字本

リ

ら 道風佛經點

ら 神樂歌古本

ら 將門記

ら 延久本漢書

ら 金澤本群書治要點

利 筝譜

り 中家尚書

丿 延久本漢書

ル 寛平御點圖古語拾遺筝譜

ル 金澤本群書治要點

レ

ル 京極本延喜式

レ 類聚名義抄門記 醫心方群書治要

レ 道風點佛書 長承本蒙求

レ 朗詠要抄

し 假字日本紀 玄奘傳

口

メ 延喜式

六 類聚名義

ワ

ヤ

ゥ 延久本漢書

○ 文治本玄奘傳

□

ゥ 道風點佛書 延久本漢書

ゥ 天治本萬葉 延久本漢書

ゥ 長承本蒙求

ゥ 天治本孝言點萬葉集

ゥ 浪花帖

禾 類聚名義、中原家尚書、日本紀古訓、醫心方

日 將門記、醫心方、古事紀、朗詠要抄

井

十 延喜式古本

十 伊呂波字類

斗 古事記眞福寺本古今集注

力 延喜式古本

工

立 長承本蒙求

卩 最勝王聊簡畧抄類聚名義成蓮院本字訓古本

已

主 延喜式

ヲ

手 箏譜

ふ 同上

ふう 今昔物語 將門記

尼 道風點佛書

ナ 箏譜尊意僧正傳

中家尚書

ウウ 延久本漢書

ラ 同

シ 同

ラ 朗詠要抄

ウ 玄奘傳

ナ 延久本漢書

片假字の類合字省文等假字本末は舉らを載せ且これを補ふ然れとも此他おの有るべし

疊字

ゝ 類聚名義中家尚書 〻 朗詠要抄

以上一字の疊字

々 圓城寺西墓點圖 〇漢文例 〳〵 類聚名義中家尚書

以上二字の疊字

二合

ヒ 朗詠要抄〇トモの二合字なり 時 中家尚書〇時の省文 寸 古語拾遺古本〇上

ヨ同 才 醫心方〇上ヨ同 ヒ 古語拾遺古本〇トキの二合 ト 拾芥抄〇トヽの二合

ヒ 興福寺延年舞詞〇トヽ云の二合 ソ 將門記〇為の省 ソ 无量壽經訓〇同上變體 ソ

玄奘傳 ノ 同上 ヽ 中家尚書〇也の全草體 や 今昔物語〇上ヨ同 七 新韻集〇同上

セ 假字日本紀 草院黙圖 玄弊傳り

ヿ 將門記○假字本末ゑ事の省と玄按そるゑコトの二合

ヿ 後深

ヿ 類聚名義○物の省

ヿ 同上○欺の省

火 クロ 玄弊傳○クワ二合の標ゑ用ゐた

片假字ゑ交へ用ゐる略體

玉 高野山中院黙圖

下 延暦寺寶々ヲ憧院黙圖

合 日本紀古本○給の省

可 ベシ 古今集注紀

申 醍醐寺本神代

平假字合字

ら 詣るの約

ら 詣らせいの約○大閤記乳母のふミ

ら 給ヘの省

ら 上ゑ同

ら へくいの約

ら いへくいの合○乳母のふミ

文藝類纂卷二終

138.
4
4